御成敗式目證註

全

7 3
6327

高井蘭山翁講釋

證註

御成敗式目

東都書林　玉巖堂梓

御成敗式目詳解　自敘

凡官士を主に仕て政治を補農民、食を作り出して貴賤を養い工匠宮殿城郭より茅屋蓬戸まで造り出して居とあらゆる商賈を交易朝暮の國用迄を辯じ。億兆の人種上は聖王出て天地を參ず。善為の化育を施し。惡を止め賊を禁ず衆生に安堵を得。孟子に云人を治る者人に

門 73
號 6327

和人を治る唯壹人のみにて成敗萬機其精神と
勞しまい耕業の力と勞もるに増るべし。往時平泰時
国刑法議して政務の務と定む。是を以て太平治る餘
年。厳后時と共に邪変化あって其国を替れども。大綱を
千萬年に易べからず。於是詳解を述て兒童小学ぶと云
欠政式子表分

高井蘭山著

安永五味均平蔵

御成敗式目
詳解

一可修理神社專祭祀事

御成敗式目詳解

東武 高井蘭山著

世と称し一人君善事とする者に成敗しめ。
悪事とする者に打敗て遂しむる也。政務の
一名と成敗式と云。罪し殺すと成敗と云ハ
非也。式とハ法度目也。編集実録の
法式目録編の武家の付。桃樹小陳泰時御定成
と俗に云ふ貞永元年壬辰八月十日法式と云て
天下を平に治むる也

一可修理神社專祭祀事

日本ハ神国なれば第一ハ神祇を重とす。法神社の
しろふ修理とくるへ時くの祭と怠るべ桃樹べし。

右神者依人之敬增威人者依神之德添運

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼奠莫令怠慢

慢理ハとさうとゝ也。彼換の和と慢ハ慢もるこゝ也

右神者依人之敬增威人者依神之德添運

右とハ神社祭祀の条とさして云。人ゝ崇め敬ハれのゝ神の威勢もてくるゝ。人ハ神法利生ふて運もらくべし

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼奠莫令怠慢

然則ハ恒例定まりある祭祀陵夷さるゝふ礼奠も神のこゝふ立ゝめく潔清ふして怠慢へからず。廉

因茲於関東御分國ヒ并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

兼又致有封

因茲於関東御分國〳〵并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

兼又致有封社主代〳〵

暑すること。後代ふ大学の序ふ教化陵夷ゝとる磨ることふいろ〳〵怠慢いとこゝあれども也

付財産を武士ゝ法ふるゝふ村里ハ古ふ地頭。其ゝ家の神社のことと頭ゝ神主ら。庄園ゝふ村と云と云ふて。村ゝ之後と比べ。庄園ハ石村と云

社者任代ト
符小破之時
且加修理若
及大破言上
子細随其左
右可有其沙
汰矣

符小破之時且加修理若
及大破言上子細随其左
右可有其沙汰矣

一可修造寺塔勧行佛事
等事

右寺社雖異
崇敬惟同仍
修造之功恒
例勧賞准先
條莫招後勘

一可修造寺塔勧行佛事

堂塔仏閣と造り法花堂と勧めたいる僧の職ふと云べうざるといふまり

右寺社雖異崇敬惟同仍
修造之功恒例勧賞准
先條莫招後勘

寺と社とハ神と仏の異なれども崇敬ハ同じことよつて破壊と修造ハ恒の例定式と勧賞ハ同じ先條とハ前ハ神社と修理すべき條目と云也後ハ仏勧ハ法あるべきを沙汰すべきを後文ハ修の沙

但慾貪寺用
於不勤其役
之輩者早可
令改易彼職
矣

一諸國守護
人奉行事

右右大將家

但慾貪寺用お不勤を役
之輩者早く令改易彼職
矣

古既の収納ハ寺の入用ニ宛べきと。他所の私ごとに費し。
寺勢と為べ。他寺ハ改易彼職と付べきなり

一諸國守護人奉行事

そもそもつくし事と云。守護人と云。寺と云なり。
行人とまり。とる。心ばと書るゝ系と云。

右右大將家御時所被定
置者。大番催
促謀叛殺害
人付夜討強盜
山賊海賊
等事也

右右大將家御時所被定置者。大番催促謀叛殺害人付夜討強盜山賊海賊等事也

右大將殿御代に定置る。大番催促謀叛殺害人付夜討強盜山賊海賊等事也

而至近年者
分補代官於
郡郷宛課公

而至近年者分補代官於郡郷宛課公事

而至近年ハ分補代官於郡郷宛課公事

事於庄保。非國司而妨國勢。非地頭而貪地利所行之企甚以無道也

抑雖為重代御家人無當時之所帯者不能駆催

兼又所ヒ下司庄官以下。假其名於御家人對捍國司領家下知云如然之輩可勤守護所役之由。緞雖望申。一切不

可加催

早任大將家御時例大番役并謀叛殺害之外可令停止守護之沙汰

若背此式目相交自餘事者或依國司領家之訴詔或就地頭土民愁歎非法之至為顯然者被改所帶之職可補穏便之輩也又至代官可定一人也

一同守護人

早任大將家御時例大番役并謀叛殺害之外可令停止守護之沙汰

若背此式目相交自餘事者或依國司領家之訴詔或就地頭土民愁歎非法之至為顯然者被改所帶之職可補穏便之輩也又至代官可定一人也

一同守護人不申宣旨被

不申支由沒
收罪科跡事

右重犯之輩
出来時者須
申子細隨左
右之處不決
實否不紀輕
重恣称罪科
之跡私令沒
收之條理不
盡之沙汰甚

收罪科跡事

右重犯之輩出来時者須申子細隨左右之處不決實否不紀輕重恣称罪科之跡私令沒收之條理不盡之沙汰甚也早注進其

自由之斟謀
也早注進其
旨宜令蒙裁
斷猶以逋犯
者可被処罪
科

新犯以逋犯者可被処罪科

謀叛と全て人と敵するとを罪と犯す事あるべきなり。
つぎよりとは。ここの乃左ちより隨ふべきなり。
定もせず。罪の輕さを重くも紀ぬとなげずわるひまうる科人の
ぬしとして私よりあるハ理とはなさず。家内の仕形をみつぐ
自由斟さ謀叛。ある後人い先ずまず事の重と須ひ紀せ上
の裁ひと為りて罪と行べ。犯せ後と逋ひ犯さばる後の
沙汰と紀ひ罪ひ行べきそこいまひらるるなり

次犯科人田
畠在家并妻
子資財事

次犯科人田畠在家并妻子資財事

於重科輩者
雖名渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡

兼又同類事
綴雖載白状
無財物者更
非沙汰限

科と犯さるゝ人の和指て
さづけゆゝと云ふの次に云へ。資ハ[illegible]すると例日用の[illegible]具と云
田畠を妻子資具財宅[illegible]
[illegible]

於重科輩者雖名渡守護所到田宅妻子雜具者不及付渡

[illegible]

兼又同類事綴雖載白状無財物者更非沙汰限

[illegible]

一諸國地頭
令抑留年貢
所當事

右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請

時宜に依て斗[illegible]白状[illegible]
[illegible]
と白状[illegible]と云ふ[illegible]

一諸國地頭令抑留年貢所當事

[illegible]田より年貢いゝ[illegible]
年貢不渡と抑留[illegible]

右抑留年貢之由有本所之訴訟者即遂結解可請

勘定犯用之条若無所道者任員數可辯償之

但於為少分

右但員數可辯償之

法食の時代よりハ大名十万貫と限るれバ限るも本所とも称し。それ〳〵村と治む。後世代変のごとく代官より地頃本所への年貢とし〳〵頃〳〵ついよ和高とし物の〻結解ハ勿論と寄用すること勿論とい未金と色と勘定すること。地頃年貢と抑留するよ本所より御詰あるべ本所の代官と地頃と寄用しべ〳〵。そと勘定と渡地頃のら頃弱ちく〳〵のごと和るべ〳〵。そと負数と負へ償ひて色すべ〳〵とこ。此時代の代官ハ旧家の名代より地頃とや渡し米と斗ものく。大名寺へ二ヶ所三ヶ所と旧るハ年貢米ハ本所と治め年限の内へ年貢と色る後ちむ。此代より到ゲるこハ年貢の内と色す。是とも後代云歌邑より地頃あり。代官あり。本所の法金とちる。それ〳〵の地と治め民と安んず。後世とハ大より拵張のうりうこと

但於為少分者早速可致沙汰到過分者三箇年中可辯濟也猶背此旨令難澁者可被改所職也

沙汰到過三箇年中ハ可辯濟也猶背此旨令難澁者可被改所職也

一國司領家成敗不及關東御口入事

一國司領家成敗不及關東御口入事

国司ハ一国のつかさ。領家ハ公家のそ所と。四家。知行ハ始ハ国司。成敗ハ始ハ公家。仕来政務と異来ハ法金とこりと

右國衙庄園
神社佛寺為
本所進止於
沙汰來者今
更不及御口
入若雖有申
旨敢不能叙
用

右國衙庄園神社佛寺為本所進止於沙汰來者今更不及御口入若雖有申旨敢不能叙用

おなじ坂の実ようの事のむくの恵名こ仕事ようせ関東武家のれいに入ゆるざる条とこえ

国衙いまの府中こ衙ハ役所とこめ。庄園とハ道あつて領地せ。むる所もも後もいろいろ所こ神社仏寺の数限家本所の名を退。そうこい事ろ所ハ今さら所に入ゆ及ず。かく定れたもとも掘ゆるきゆめとゆるゆるありともそれとも。あつて中許容あるべからず叙用とハ他ゆうゆるゆと叙用ゆと云ゆ事又他の字上ようべし。他ゆ為ハ所を山沙汰事ようくのごとく改てよし

次不帯本所
挙状致越訴
事

次不帯本所挙状致越訴事

ゆゑとあるものハ本所ようの事を。とりあつて所へ出る定法也。さもなく越訴すると。越訴ゆそ禁制ゆるいつの世も勢ゆこと。今の世より和の支配が流ゆるゆきと云越訴とこの同じ

諸國庄園并
神社佛寺領
ハ本所挙状
可経訴訟之

諸國庄園并神社仏寺領ハ本所挙状可経訴訟之

を止ハを退と同じく流ゆ

慮不帯其状
者既背道理
欲自今以後
不及成敗

一右大将家以後代々将
軍并二位殿
御時所宛給
所領等依本
主訴訟被改
補否事

右或募勲功
之賞或依官
仕之労拝領
之事非無由
緒

而稱先祖之

欲自今以後不及成敗

一右大将家以後代々将軍并二位殿御時所宛給所領等依本主訴訟被改補否事

右大将頼朝公以後二代目頼家公三代目実朝公頼朝公の御軍

頼朝公の御時分二代目頼家公三代目実朝公の御時尼公実朝公の母君にて二位殿と申す

先此家を持政を家その三男と称し武蔵の国の代官にて頼朝公に仕へ奉り代々の忠を身の忠にて身の勲功を伝へ奉り知行の地を上あんやう上あんやうにて本の知行地と補せられ候ものとり給ふ者共のもといろく忠を尽すものもみうんをの

右或募勲功之賞或依官仕之労拝領之事非無由緒

而稱先祖之

本領於蒙裁許者。一人綴雖開喜悦之冒傍輩定難成安堵之思歟盛訴之輩可被停止

但當時給人有罪科之時。本主守其次

許之一人綴雖開喜悦之冒傍輩定難成安堵之思歟盛訴之輩可被停止

但當時給人有罪科之時本主守其次

企訴訟事。不能禁制歟

次代ヒ御成敗畢後擬申乱事

依無其理被弃置之輩。歴歳月之後企

能禁制歟

次代ヒ御成敗畢後擬申乱事

依無其理被弃置之輩歴歳月之後企

訴訟之条存知之旨罪科不輕自今以後不顧代ヒ之御成敗猥致面ヒ之濫訴者須以不實之子細被書載所帶之證文

知行之後五十箇年者任右大將家之例不論理非不能

一雖帶御下文不入令知行經年序所領之事

右當知行之後過二十箇年者任右大將家之例不論理非不能

改替

而申知行之由掠給御下文輩。雖帯彼状不及叙用

一謀叛人事

右式目之趣兼日難定欲且任先例且依時儀可被行之

一殺害刃傷罪科事

右或依當座之諍論或依遊宴之醉狂

而申知行之由掠給御下文輩雖帯彼状不及叙用

今知行する所二十年来とゝ〻まり〻〻改替するべき事

たゞ文わかの時分の例〻

多年知行のすゝとゝて第紙とゝ〻めをかるゝこと不審なり

ず。彼状下文と号すれども叙用するまじきこと也

一謀叛人事

謀叛人とは敵人天下をくつがえさんとくわだてること

右式目之趣兼日難定欲且任先例且依時儀可

一殺害刃傷罪科事

人殺害と刃とを云。殺害は第一番のとがなり。

と云る字の義なれども強の義より殺害と書。

二人なりのことなれば罪の軽重あること

難されば先〻この例と長ひ又は時の宜しきにしたがひて行べし

なり。殺害の宜と同じ。大なる儀殺害とあるにて知べし

右或依當座之諍論或依遊宴之醉狂

不慮之外若犯殺害者其身被行死罪并被處遠流雖被没收所帶其父其子不相交者互不可懸之

犯殺害者其身被行死罪并被處遠流雖被没收所帶其父其子不相交者互不可懸之

あらかじめ禁令の律編御のくてうおころ。於奥州宴の解犯すしして不意人を殺害し。後より悔るもでんるく。意よりて人命を殺害し。後より悔るもでんるく。意よりて禁令に依て禁人の配罪又い流罪に被れ初めい没收でらるといへども。其人の父母おみも不知はあらず。其罪に拘らずい科と知べきなり。但し除に不意のかとあるかのなかいるき方ばらてとらる。不意とて殺害ひのかと又かのなかとかるべし。

次刃傷科事同可准之

次刃傷科事同可准之

刃傷とい刃物い白刃と指て人に傷く。落ものもまべく又い源まもてつかい死に至もあるべし。殺害の科に准へ分別せもと

次或子或孫於殺害父祖之敵父祖縱雖不相知可被處其罪為散父祖之憤忽遂宿意之故也

次或子或孫於殺害父祖之敵父祖縱雖不知可被處其罪為散父祖之憤忽遂宿意之故也

てき敵とい父祖つけ。怨敵のもひに思ひ。孫のけをとり人を分別なりち討ものとる。父祖さるとと知ずとも。父祖の思ひ思ひ思して殺害をと上い科と無べらずとも。罪ものとい強くもの少とも

次其子若欲奪人之所職若為取人之財寶雖企殺害其父不知之由在状乃明者不可處縁坐

一依夫罪科妻女所領被没收否事

次其子若欲奪人之所職若為取人之財寶雖企殺害其父不知之由在状乃明者不可處縁坐

一依夫罪科妻女所領被没收否事

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫咎也但依當座口論若及刃傷殺害者不可懸之

罪科につくべき妻女の所領は女房にて別に所望するものなり。夫の罪よりそれも没収とそ上らるべき事也

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫咎也但依當座口論若及刃傷殺害者不可懸之

謀叛殺害・山賊海賊夜討強盜のことは論なしとも生らう。代表は初一文のとおわるべき事として知べきことなべし

一惡口咎事

右鬪殺之基起自惡口其重者被處流罪其軽者可被召籠也

問注之時吐惡口則可被付論所於敵人

又論所之事無其理者可被没收他所領若無所帯者可處流罪也

一惡口咎事

人と後ろ指さすなどいふ人と遍ろうどい婦女といへども知らず。俄に論ずるとも不可なり。よつて咎めとゞめられさるべき事

右鬪殺の基起自惡口重者流罪軽者可召籠也

問注の時吐惡口則可付論所於敵人

論所といふ人と敵すると云ふ所論所ハ宅ハ押籠。又ハ牢舍ともいふ

又論所之事無其理者可被没收他所領若無所帯者可處流罪也

論所とは双方の中にて問礼し。相互に論ずると云ふ。論所とハ今互に牢人ハ論人と對決の時。惡口をはきかけばと怒ざる不敬に依て。論所と惡口せられ論人しかくるもんと堀ふくと定る。

又論所之事無其理者可被没收他所領若無所帯者可處流罪也

論ずる所の事に理あるべき。無理の咎に依てあるべきの知りと知られるべし。知れば無理の咎に依てあるべきの知りと知られるべし。知れば無理の咎に依てあるべきの知りと知られるべし。

一 毆人咎事

右被打擲之輩為雲其恥定露害心故毆人之科甚以不輕仍於侍者可被没收所須無所帶者可處流罪至郎從以下者可令召禁其身也

一毆人咎事

毆とい杖棒と以て人をうちくくん。を殺と云

右を打擲こと為雲を恥定露害心故毆人こと科を以不輕仍於侍者を毆殺流罪至郎從以下者可令召禁其身也

一代官罪科 懸主人否事

右代官之輩有殺害以下重科之時件之主人召進其身不可懸

一代官罪科懸主人否事

打擲れこと恥辱と含みを祇候と為て。を人と殺害せんも科すべし。然らば殺すこともあるべし。然は主を科すべきこと。されば元の知り小半と抜き出げこと。仍て他の知り之を引うを人と打擲せば知りと云はさるべし。

從古來雲を半身神不知不覺今もしかべし。以下と云は中間神なでこと

右代官雲を有殺害以下重科之時件之主人召進其身不可懸

國くの古獲の中よりく所の代官を捕えを時。そこをくるを也。

科

但為扶代官。無咎之由主人陳申之処。實犯露顕者難遁其罪。仍可被没收所領。至彼代官者可被召禁也

但為扶代官無咎之由主人陳申之処實犯露顕者難遁其罪仍可被没收所領至彼代官者可被召禁也

科と犯すべきと主人を捕へ先ひさびきの人を捕へ

犯すと犯す代官とをひとしく主人より扶て陳申する和。実を犯露のときハ主人の知りと云てこれ代官ハ義をうべし。罪科ハ向まる為罪のときハ主人の知りと云てこれ刑と加へんとの為とそいへり

兼又代官或抑留本所之年貢或違背先例之率法者雖為代官之所行主人可懸其科也

兼又代官或抑留本所之年貢或違背先例之率法者雖為代官之所行主人可懸其科也

率法とハ法度と率と別へしなり。代官本和の為ハ主人と抑留ハ年貢と違背ハ先例仕来りの法度仕ハ主人もわ懸べしなり。古和の代官と云

加之代官若依本所之訴詔若就訴人

加之代官若依本所之訴詔若就訴人解状自関東

解状自関東
被召之自六
波羅被催之
時不遂参決
猶令張行者
同又可被召
主人所帯但
隨事躰可有
軽重歟

一謀書罪科事

右於侍者可
被没收所領
若無所帯者
可被處遠流
也凡下之輩
者可被擦火
印於其面也

まて張行をもつ系六波羅へも召出すべき事と定さる

一謀書罪科事

係書とは仰せ事とるまてしてをくを罪科とこ云

右於侍者可被没收所領
若無所帯者可處遠流
也凡下之輩者可被擦火
印於其面也

執筆者又與
同罪次以論
人所帯之證
文為謀書之
由多以称之
披見之處若
為謀書者尤
任先條可有
其科又無文
書之訛謬者
仰謀畧之輩
可被付神社

佛寺之修理
但到無力之
輩者可被追
放其身也

一 兼久兵乱
時没收地事

文為謀書之由多以称之
披見之處若為謀書者尤
任先條可有其科又無文
書之訛謬者仰謀畧之輩
可被付神社仏寺之修理
但到無力之輩者可被追
放其身也

一 兼久兵乱時没收地事

八十二代の帝と没号飛鳥院と申。八十三代の帝を門院
ハ没号後堀河院の宮と申。八十四代の帝と順徳院と申。
門院の御子に仲恭天皇と申。兼久三年七月廿九日飛鳥院と
申。預倉の執権ハ宗右馬の頭義時と長河せんと
申ハ北条の執権の威と追つ天下と萬めす。武勇の誉
義時代の事動のゝ乱ハ天下のこと

一つ〻元亀の四乙酉年より後世まで源義朝
義朝時房と大将軍として張大弓を引て合
戰し。同十四日宮方勢多の合戰皮軍毎度利を失ひ
同十五日宮方勢多を付入る流て城を攻落す
と。七月十二日房俊(流)吹挙と作成(流)国十月
古城内虎と古城(迄)迄し。当義虎の四孫と云て即位あり。
八十五代後堀河虎 此虎より 此虎より 当方(公)と号し 張弓
皆絶てられ。死絶と没収せられ。是と兼久の兵
乱と云ふ。三代の帝と主従と古今の奇
変也代没世てられ。此の帝と書る除也

右致京方合戰之由依聞食及被没收耶帯之輩無其過之旨證拠分明者宛給其替於當給人可返給本主也是則於當給人者有勲功之奉公之故也

次關東御恩輩中交京方之合戰事罪

右致京方合戰之由依聞食及被没收耶帯之輩無其過之旨證拠分明者宛給其替於當給人可返給本主也是則於當給人者有勲功之奉公之故也

次關東御恩輩中交京方之合戰事罪科法定仍即

科殊重仍即被誅其身被没収所帯畢而依自然之運道来之族近年及聞食者緯已逮期之上尤就寛宥之儀割所領内可被没收五分一但御家人之外

科殊重仍即被誅其身被没収所帯畢而依自然之運道来之族近年及聞食者緯已逮期之上尤就寛宥之儀割所領内可被没収五分一但御家人之外

下司庄官之輩京方之咎緩雖露顕今更不能改沙汰之由去年被議定畢者不及異儀

下司庄官之輩京方之咎緩雖露顕今更不能改沙汰之由去年被議定畢者不及異儀

次以同没収之地稱本領主訴申事當知行之人依

次以同没収之地稱本領主訴申事當知行之人依

有其科没收之宛給勲功之輩畢而彼時知行者非分之領主也任相傳之道理可返給之由訴申之類多有其聞既就彼時知行普被没收畢何閑當時之領主可尋往代之由緒哉自今以後可停止監望矣

一同時合戦罪科父子各別事

右父者雖交京方其子候関東子者雖

有其科没収之宛給勲功之輩畢而彼時知行者非分之領主也任相傳之道理可返給之由訴申之類多有其聞既就彼時知行普被没収畢何閑當時之領主可尋往代之由緒哉自今以後可停止監望矣

一同時合戦罪科父子各別事

右父者雖交京方其子候関東子者雖

兼久の私はとうあけられし紙と迫く勲功わるるを
ひ〻まれるとかの所領なれバ〻〻と伝ふる事
知しと笑はれども彼私の時の所領ハ科ゆて没収せられ
ほ〻の所領なれバ〻〻ふ科すべきいはれなし何で
あ時の所領と雖て領代の中法と云ふ知人今落涙
の定とかゝるこハ信じ出まとこと

兼久の時の所領なるりしも科ゆくるるを云

交京方其父候關東之輩。賞罰已異罪科何混

一西國住人等雖爲父雖爲子一人參京方者住國之父子不可通其咎。雖不同道依令同心也。但行程境遥音信難通。共不知子細者互難被處罪科歟

一讓與所領於女子後依有不和儀其

候関東之輩賞罰已異罪科何混

京方となりたる人は殺され関東に候ずるは恩賞あり。されば其親子といへどもかくのごとくなれば罪科も又京方致せし其恨なり

一西國住人等雖爲父雖爲子一人參京方者住國之父子不可通其咎雖不同道依令同心也但行程境遥音信難通共不知子細者互難被處罪科歟

住人とは諸国に別してある武士之小身の者をいへり住人といひつたへしも其国に住むものは皆住人と名づくる也据之駿河の國の住人某甲三郎などと諸国にもおほくありき人之皆此のごとし。其国の者で父子もそれも一人京方に参らば其余に残る親子は罪科をのがるべからずといへども不同道いは合する故也。但行程境を隔てて音信もとゞかざるぐるしき互に其事のしらざる者は罪せられざるべき事なり

一讓與所領於女子後依有不和儀其親悔還否事

親悔返否事

右男女之号雖異父母之恩惟同法家之倫雖有申旨女子則憑不悔返之文不可憚不孝之罪業父母亦察及敵對之論不可讓

右男女之号雖異父母之恩惟同法家之倫雖有申旨女子則憑不悔返之文不可憚不孝之罪業父母亦察及敵對之論不可讓

[illegible]博士明法家[illegible]悔返[illegible]旨あり[illegible]女子[illegible]文と[illegible]孝[illegible]ほざる[illegible]父母の方[illegible]敵対の論[illegible]及んでとい[illegible]べし

所領於女子歟

親子義絶之起也既教令違犯之基也女子若有向背之儀者父母宜任進退之意依之女子者為全讓状竭至孝之

親子義絶之起也既教令違犯之基也女子若有向背之儀者父母宜任進退之意依之女子者為全讓状竭至孝之

節。父母者為施撫育均慈愛之思者欤

祝子弟と書ひ来と迫ことの起祝の教へと犯し遠の奏え。況ハ祝の色を遂る何で悔改すべし。何宵へてこひいてもむくとこ云ハ若也とかへ宵ハ祝の作ま陸へ心何でまを迫すべしとめ〜あらハ懐文戒め呵り。祝の心何でまを迫すべしとめ〜あらハ懐文

〜る西欧とるるへされんことを祝れ懐妊と今へでんことて者のも拵と切ひ。祝ハ拵育若也のもひ始る浴と拵るん

るり。は時代りん君分治る西欧の用とと多祝て如のへも分ち也すめ多如の知めりとこと云ことあり是といえるへさぬこと云

も扱るさまわ〜ぞ。父母の存ぬ云ハ男も女も同〜我るん男るハ親労とつ〜さハるる孫ともハ扱べ〜。女ハハ山ことるる生

懐人ま陸拵りの多れハ疑別でるこ〜ともあり親存世の同いともあれ。兄弟の世とるりて云ハ弟るる不良生

まわんと。孝〜恭〜てのひざるれハ孝〜この若也ハ多ハ。兄弟の世ま多ハ多ハ祝より女ま〜へ分る知めハいろ〜ぬ

〜〜宮むるハ祝の若恭と今〜せ〜めんと。陸世すん農

高ま八田沈町町欧と女ハまる分ることあれども武家ま

廿六

一不論親疎之養輩遠背本主子孫事

一不論親疎之養輩遠背本主子孫事

祝養輩遠背本主子孫事

右憑人之輩。被親愛者如子息不然又如郎従欤爰

右憑人之輩。被親愛者如子息不然又如郎従欤爰

祝親疎ハ如ものへ祝ハ分つ〜る。如ハ吹陸と弟〜とすることるる。祝の家ハ男始ハ孝とる。孝ハ吹陸

のとと考ハ〜れハ孝孫ることて一生思ハ変ることハ。風家ハ

せ〜ともま若ハりのれハ。そ時〜風俗ま陸て沒とせ〜

祝親疎ハ如ものへ祝ハ分つ〜る。如ハ吹陸と弟〜とすることるる。祝の家ハ男始ハ孝とる。孝ハ吹陸

のとと考ハ〜れハ孝孫ることて一生思ハ変ることハ。風家ハ

せ〜ともま若ハりのれハ。そ時〜風俗ま陸て沒とせ〜

祝親疎ハ如ものへ祝ハ分つ〜る。如ハ吹陸と弟〜とすることるる。祝の家ハ男始ハ孝とる。孝ハ吹陸

のとと考ハ〜れハ孝孫ることて一生思ハ変ることハ。風家ハ

せ〜ともま若ハりのれハ。そ時〜風俗ま陸て沒とせ〜

祝親疎ハ如ものへ祝ハ分つ〜る。如ハ吹陸と弟〜とすることるる。祝の家ハ男始ハ孝とる。孝ハ吹陸

のとと考ハ〜れハ孝孫ることて一生思ハ変ることハ。風家ハ

せ〜ともま若ハりのれハ。そ時〜風俗ま陸て沒とせ〜

祝ハ若者ま親ハ祝親疎ハ人ま養ハ祝ハ孝ハ祝ハ孝ハ

のとと云。祝ハ孝ハ祝ハ孝ハ祝ハ孝ハ祝ハ孝ハ

彼輩令致忠勤之時本主感歎其志之餘或渡宛文或與譲状之処称和与之物對論本主子孫之條結搆之趣甚不可然

感歎其志之餘或渡宛文或與譲状之物對論本主子孫之條結搆之趣甚不可然

人は為て道を説くべきの子孫のめく。身さきのまゝ奉公のごとく。はたゝ骨折て。
為の忠志と感じ宛文譲状と云ハ何の用何
と宛文と云。譲状又同じ。本主没後よ本主のゝ孫ゝ
對し。我ハ仕ハ子の物ゝれバ主元の恩ゝ忘ゝて同ゝ
えゝ對論せんとすゝめゝと結び搆る際一時ゝ思慮
と仕形を物ゝ合点してとゝむゝ和

求媚之時者且存子息之儀且致郎従之礼向背之後者或假他人之号或成敵對之思忽忘先人之恩顧

求媚ゝ時者且存子息之儀且致郎従之礼向背之後者或假他人之号或成敵對之思忽忘先人之恩顧

きてすゝとわ子ゝ云

媚へらふ時ハ子の恩ゝ
出い奉公ゝ致ゝ礼とゝ。のちゝ向背。他人
の為ゝと云ハ他人の名と假て先人ゝ恩ゝ顧とゝ
たゝと云ゝ。恩ゝと仇ゝて報ゝ不ゝ人偽の名ゝ

違背本主之子孫者於得

違背本主之子孫者於得

譲之所領者。可被付本主之子孫矣

一得譲状後其子先于父母令死去跡事

右其子雖令見存到令悔返者有何妨

哉況子孫死去之後者只可任父祖之意也

一妻妾得夫譲被離別後領知彼所領否事

右其妻依有重科於被弃捐者。縱雖有

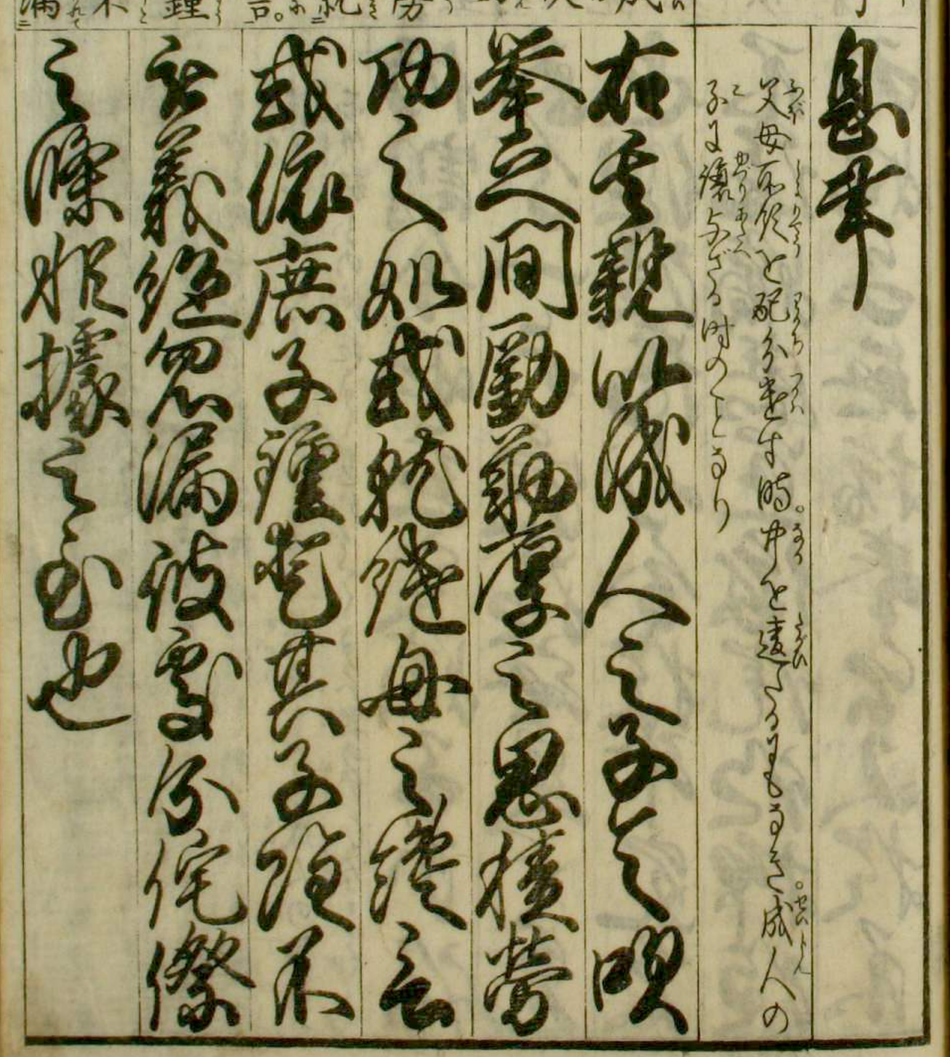
往日之契状難知行前夫之所須

又彼妻有功無過賞新弃舊者所譲之所須不能悔還

一父母所須配分之時雖非義絶不譲

興成人之子息事

右其親以成人之子令吹舉之間勵勤厚之思積勞功之処或就繼母之絶言或依庶子鍾愛其子雖不被義絶忽渦



彼處分住僧之條非據之至也

仍割分所立之嫡子分以五分一可宛給無足之兄也但雖為少分於斗宛者不論嫡庶陸

依證跡抑雖為嫡子無指奉公又於不孝之輩者非沙汰限

一女人養子事

右如法意者雖不許之右大將家御時

成人の嫡子のみ成人の嫡子のみ成人の嫡子のみ

仍割分所立之嫡子分以五分一可宛給無足之兄也但雖為少分於斗宛者不論嫡庶陸

依證跡抑雖為嫡子無指奉公又於不孝之輩者非沙汰限

一女人養子事

右如法意者雖不許之右大將家御時

以来到于當世無其子之女人等讓与所領於養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先從惟多評議之處尤足信用歟

世間に女人が譲与所領養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先從惟多評議之處尤足信用歟

一讓得夫所領後家令改嫁事

右為後家之輩讓得夫所領者頂抱他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎歟而忽怠貞心令改嫁

一讓得夫所領後家令改嫁事

夫の所領を後家に譲る場合。他人と再縁する時。男の為づる知行。知るべきこと

右為後家之輩讓得夫所領者頂抱他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎歟而忽怠貞心令改嫁

者。以所得之
須知。可宛給
亡夫之子息。
若又無子息
者。可有別御
計

一関東御家
人以月卿雲
客為聟君。依
讓所領事
之足減少事

亡夫之子息若又無子息
者可有別御計

一関東御家人以月卿雲
客為聟君依讓所領事
之足減少事

右於所領者
讓彼女子雖
令各別至公
事者随其分
限可被省宛
也

右於所領者讓彼女子雖
令各別至公事者随其分
限可被省宛也

とするよりそなへい軍役を勤ざる所あるの条ゆ[illegible]
の軍役減ずくるるとそ

親父存日
成優恕之儀
雖不宛課逝

親父存日成優恕之儀
雖不宛課逝

去後者尤可
令催勤

若募権威不
勤仕者永可
被辞退件所
領欲凡雖為
関東祇候之
女房敢勿泥
殿中平均之
公事此上猶

令難澁者不
可知行所領

一譲所領於
子息給安堵
御下文之後
悔還其領譲
與他子息事

右可任父母
之意之由具

以載先條畢。仍就先判之譲雖給安堵御下文。其親悔返之。於譲他子息者任後判之譲可有御成敗

一未處分跡事

載先條畢仍就先判之譲雖給安堵御下文其親悔返之於譲他子息者任後判之譲可有御成敗

一未處分跡事

右且随奉公之浅深。且糺器量之堪否。各任時宜可被分宛

一構虚言致讒訴事

右和面巧言

右且随奉公之浅深且糺器量之堪否各任時宜可被分宛

一構虚言致讒訴事

右和面巧言

掠君損人之
属文籍所載
其罪甚重為
世為人不可
不誡為望所
領企誣訴者
ど誣者之所
須可宛給他
人無所帯者
可處遠流又
為塞官遠搆
誣言者永不
可召仕彼誣
人

可召仕彼誣
人

一閤本奉行
人附別人企
訴訟事
右閤本奉行
人更附別人
内ヒ企訴訟

ゑ偽れ拵への証右の書籍よ載せらるる所悪逆にして重罪
なる。世上の名誉人のなさびしく誡べきものなり。不
仮の宝より人を倒さん為後生を全るるべし。都て後人
の不仮と棄て。後世せられるもの不幸なる後人
に流罪よ受せらるべし。又なるべ世もろ人とうらやましね
く。友達と寒さん為よ後生を捨ちい永代召仕る
ものとこそ友達へつるものなりと例。ふさぐとい出世のなとと
むるるり

一閤本奉行人附別人企
訴訟事
右閤本奉行人更附別人
内ヒ企訴訟

之間。參差之
沙汰不慮而
出来欤。依於
訴人者。暫可
被抑裁許至
執申人者。可
有御禁制。奉
行人若令緩
怠。空經二十
箇日者。於庭
中可申之

一遂問注輩。
不相待御成
敗。執進權門
書狀事

右預裁許者
悦強縁之力。
被弃置者愁
權門威

爰得理之方人者。頻称扶持之芳恩。無理方人者。竊猜憲法之裁断。黷政道職而斯由。自今以後。慥可停止也。或付奉行人或於庭中可令申之

一依無道理不蒙裁許之輩。為奉行人偏頗之由訴申事

縁と称する輩と。ひいきの威勢によりて。頻に賄賂を貪りて。

爰得理之方人者頻称扶持之芳恩無理方人者竊猜憲法之裁断黷政道職而斯由自今以後慥可停止也或付奉行人或於庭中可令申之

於理の理をて裁判より理と許されて。結る。を方さ恩人いひきと縁ありて。扶持して。芳恩と称して

貪る方人は政乱の憲法を犯て裁判を曲げ。天下の政乱は邪もひいきえんえる。憲法かも私曲む。猜べき理あり負べき恥を恥ぢて私曲をちらと。猜偏あらば政乱と汚黷ものかえ。以後邪伝ごのに入しに入と恥むをも厳しく停止をひいきさるべき庭中

一依無道理不蒙裁許之輩為奉行人偏頗之由訴申事

裁判の理の理なきの裁許。又裁判の理なき所をと免と多のは裁許。さらめるすと判乱理を叶ざるめえ。

なきをなきの偏頗依怙の為て判乱する業の事あり

右依無其理不関裁許之輩為奉行人偏頗之由構申之條太以濫吹也自今以後構出不実企濫訴者可被没公所須三分一無所帯者可被追却

右依無其理不関裁許之輩為奉行人偏頗之由構申之條太以濫吹也自今以後構出不実企濫訴者可被没公所須三分一無所帯者可被追却

若又奉行人有其誤者永不可被召仕

若又奉行人有其誤者永不可被召仕

一隠置盗賊悪党於所領内事

一隠置盗賊悪党於所領内事

右件輩雖有風聞依不露

右件輩雖有風聞依不露

顕不能断罪。不加炳誡而國人等差申之處召上之時者其國無為也在國之時者其國狼藉也 云ヒ

仍於縁邊之凶賊者付證跡可召禁

又地頭等到隠置賊徒者。可為同罪也。先就嫌疑之趣召置地頭於鑓倉彼國不落居之間者。不可給身暇

次被停止守護使入部所事同悪党等出来之時者不日可召渡守護所也若於拘惜者旦令入部守護使旦可被改補地頭代

也若又不改代官者被没収地頭職可被入守護使

一強竊二盗罪科事付放火人事

右既有断罪之先例何及

也若又不改代官者被没収地頭職可被入守護使

一強竊二盗罪科事付放火人事

右既有断罪之先例何及

猶預之新議
哉

次放火人事。
准據盜賊法
令禁遏

一密懐他人
妻罪科事

右不論強姦

犯緣之新議哉

放火人事准據盜賊法
令禁遏

放火人の盜賊に准ずべき事人命刑の後と
禁遏の義なり

一密懐他人妻罪科事

他の妻懐抱人

右不論強姦和姦懐抱人

和姦懐抱人
妻之輩被
所須半分可
被罷出仕無
所帯者可處
遠流也女之
所領同可被
召之無所須
者又可被配
流之也

妻之輩被召所須半分可被罷出仕無所帯者可處遠流也女之所領同可被召之無所須者又可配流之也

他の妻懐抱りの人知りまと云ふ仕とぞ犯す。
女の実へごろと流て犯をとこ。ぐいよ合点して わざ犯す。
けあふと別ぐ。他の妻懐抱りの人知りまと云ふ仕とぞ
め。知りるときい者さ流さるべし。女も知りと云ふらべし。
知りるときい流さるべし。女わ姦のもんと云。法姦わ女と罪
まるよあるべ。配流わ流罪なり。男と女と別ぐ流さと云わ
實てり流刑と配流といること法もよるべ

次於道路辻捕女事於御家人者百箇日之間可止出仕

到郎従以下任右大将家御時之例可剃除片方之鬢髮也

但於法師之罪科者當其時可被斟酌

一雖給度ヒ名文不參上科事

右就訴状遣

次於道路辻捕女事於御家人者百箇日之間可止出仕

乱倫よ清盛ひ女人と戦りのるり

到郎従以下任右大将家御時之例可剃除片方之鬢髮也

郎従とハ人の子堂うのるり。子うの面くハ敷ハ女と捕ゝも
のハ敷ハ時代の御ゝ片くの髮と剃除べし

但於法師之罪科者當其時可被斟酌

斟酌ハくみもるる。法師ハ右の科あるべ。其時ゝ強
く罪とそらんと

一雖給度ヒ名文不參上科事

御人月安ととる。名ハ百文とゝりて名系
の科ゝ但一ハ時代ハ百文とやされ七百まらても名系れ
ハ。又使ととらるることゝ後るる宮めゝ

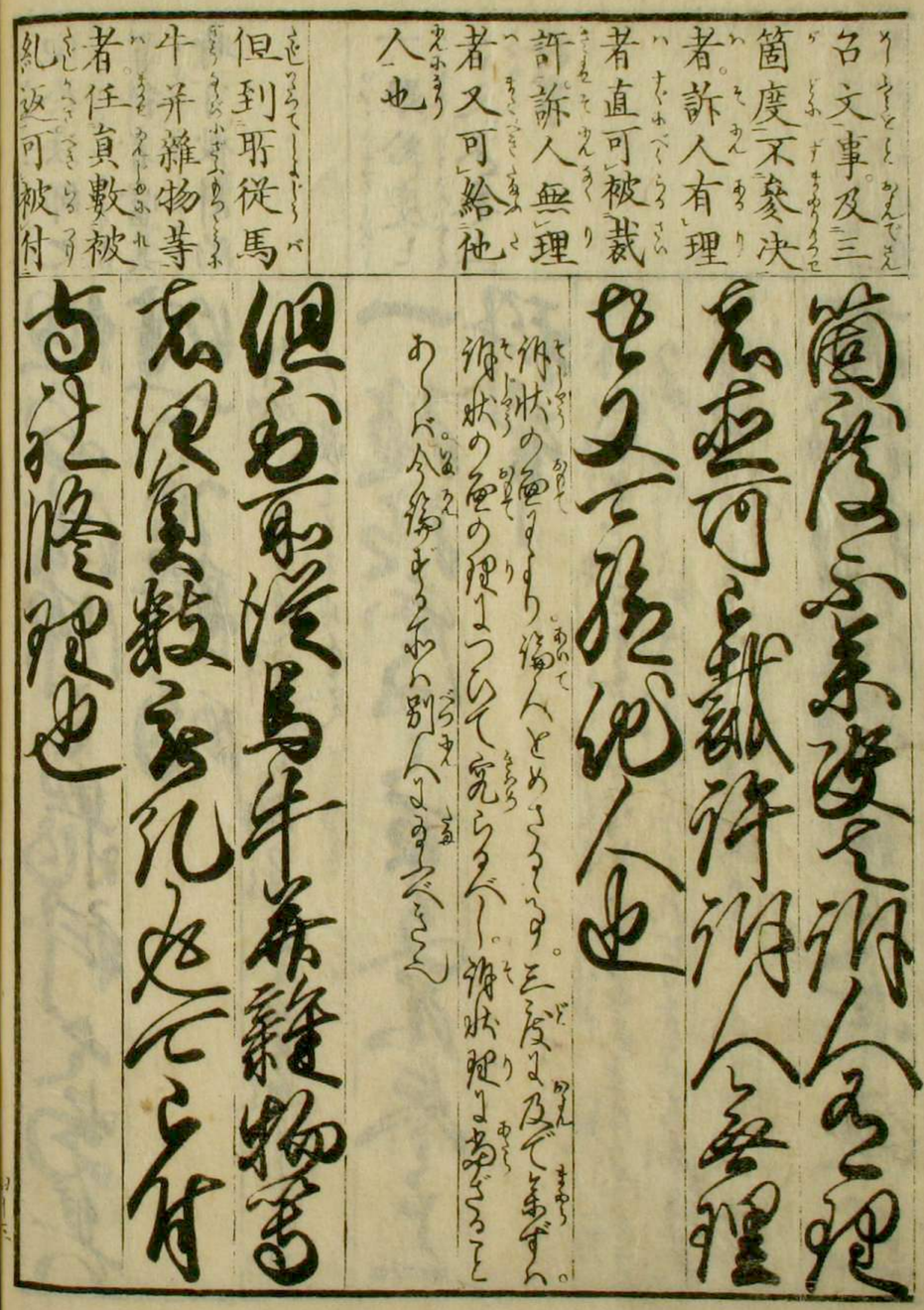
右就訴状遣

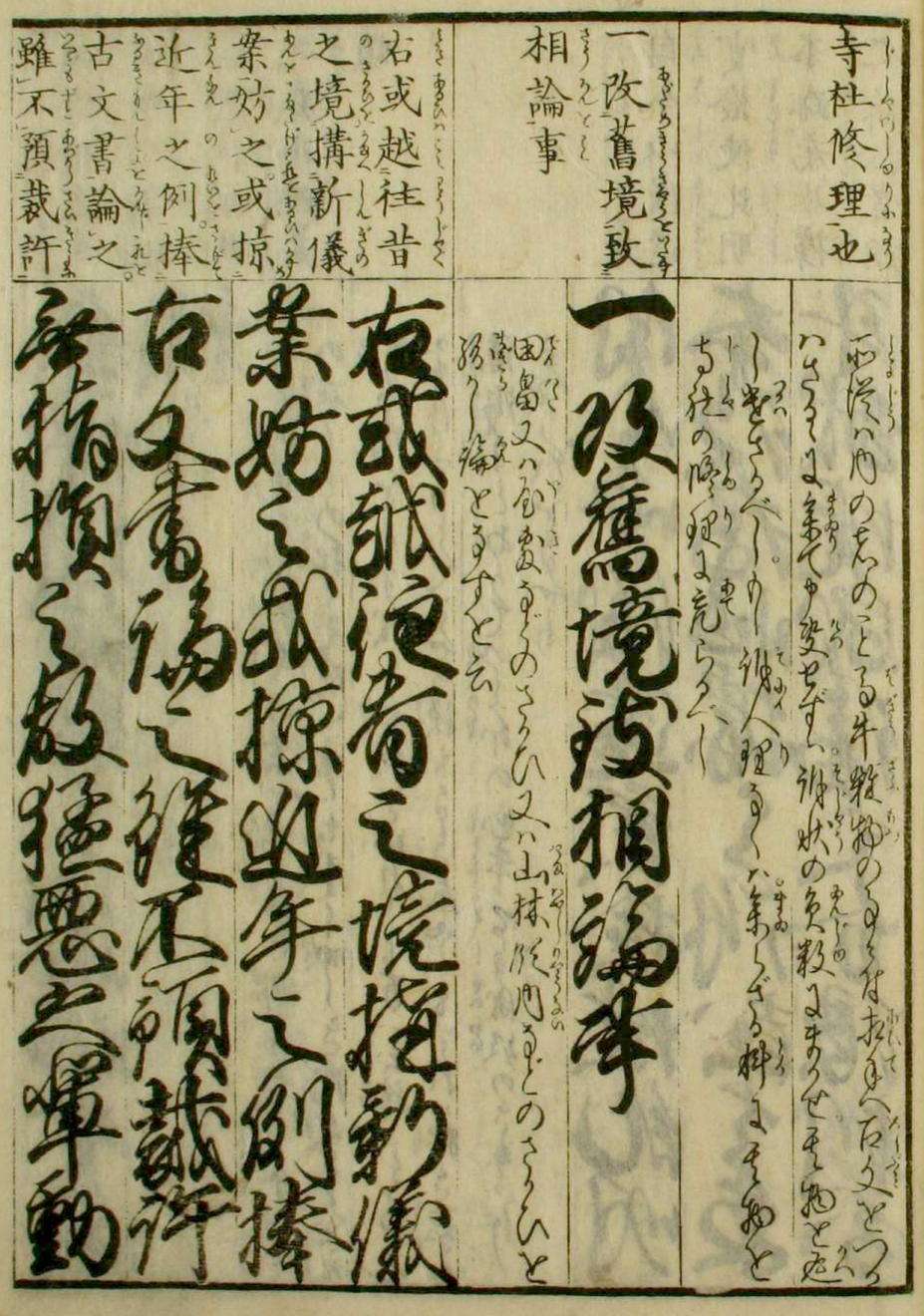
名文事及三箇度不奏決者訴人有理者直可被裁許訴人無理者又可給他人也

但到所従馬牛并雑物等者任員數被糺返可被付寺社修理也

一改舊境致相論事

右或越往昔之境構新儀案妨之或掠近年之例捧古文書論之雖不預裁許





無指損之故。
猛悪之輩動
企謀訴成敗
之處非無其
煩

自今以後遣
實檢使糺明
本跡。為非據
之訴訟者。相

斗越境成論
之分限。割分
訴人須知之
内。可被付論
人之方也

一開東御家
人申京都望
補傍官所須
上司事

右大将家之御時一向被停止畢

而近年以降企自由之望。非啻背禁制令覃喧嘩欤。自今以後於致濫望輩者。

右大将家之御時一向被停止畢

而近年以降企自由之望。非啻背禁制令覃喧嘩欤。自今以後於致濫望輩者。

可被召所領一所也

一惣地頭押妨所領内名主職事

右給惣領之人。称所領内掠領各別村事。所行企難

一惣地頭押妨所領内名主職事

右給惣領之人。称所領内掠領各別村事。所行企難

道罪科爰給
別御下文雖
為名主職惣
地頭若伺歴
弱之隙有限
沙汰之外巧
非法致盛妨
者可給別納
御下文於名
主也又寄事
於左右不顧
先例遠背地

為名主職地頭若伺歴
弱之隙有限沙汰之外巧
非法致盛妨者可給別納
御下文於名主也又寄事
於左右不顧先例遠背地
頭者可被改
名主職也

一官爵所望
之輩申請関
東御一行事

一官爵所望之輩申請関
東御一行事

無沒収と云ふは地頭たとへば一郷の惣領の下に二ヶ村三ヶ
村と云ふ所ありて惣領又は社の沒収おも入交りてあり惣
領は別に沒収しなくとも時代の変りて頼朝の御代に成
いまもそこの隙に沒収の知行も社領おの沒収の届めなり。

四十六

無沒収とは惣領の沒収の下に二ヶ村三ヶ
村と云ふ所ありて惣領又は社の沒収おも入交りてあり惣
領は別に沒収しなくとも時代の変りて頼朝の御代に成
いまもそこの隙に沒収の知行も社領おの沒収の届めなり。

39

無沒収とは惣領の沒収の下に二ヶ村三ヶ
村と云ふ所ありて惣領又は社の沒収おも入交りてあり惣
領は別に沒収しなくとも時代の変りて頼朝の御代に成
いまもそこの隙に沒収の知行も社領おの沒収の届めなり。
されども我こそ地主なりと押沒し。名主の職ちがひて領主と領
限りある本沒収の外に別に沒収とて沒収。
地頭の科と雖れども。名主のうへ名主職の別に沒収
さすがに沒収とも名主職を改へらるべし。
て本沒収とも名主職を改へらるべし。
名主職を改へらるべ
時代に知りの社領知よりの沒収あり。名主職
又ここに代代のごとくなり

一官爵所望之輩申請関東御一行事

皮は母鼻は佐之皮佐の中ある人実朝の四番目と中
佐なるべし

右被召成功之時被注申所望人者既是公平也依非沙汰之限為昇進申挙状事不論貴賤一向可停止之

右被召成功之時被注申所望人者既是公平也依非沙汰之限為昇進申挙状事不論貴賤一向可停止之

但申受領検非違使之輩於為理運者雖非御挙状只有御免之由可被仰下歟

但申受領検非違使之輩於為理運者雖非御挙状只有御免之由可被仰下歟

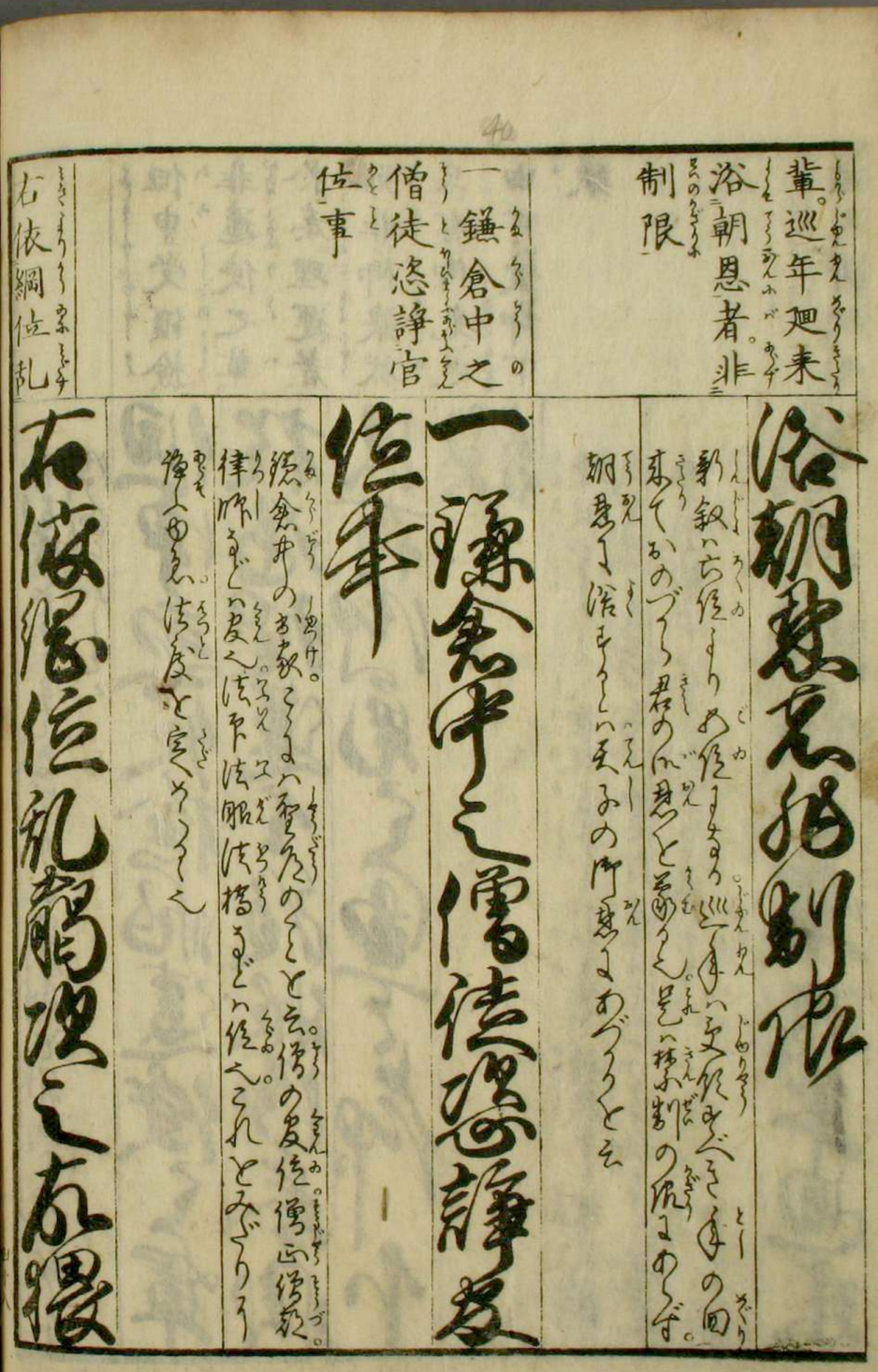
兼又新叙之

兼又新叙之輩巡年四週来

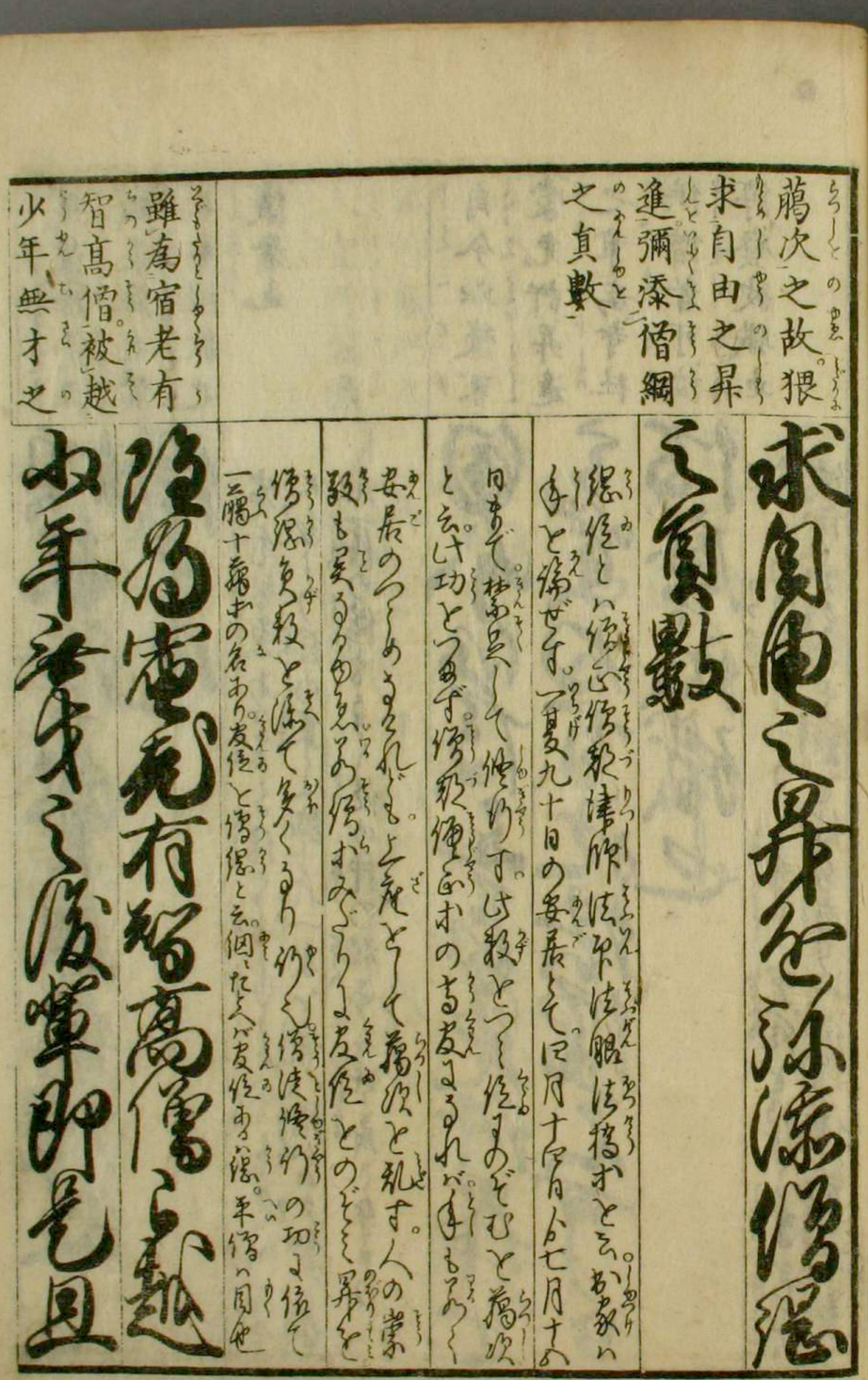
輩。巡年廻来浴朝恩者。非制限

一鎌倉中之僧徒恣諍官位事

右依綱位乱



藤次之故。猥求自由之昇進。彌添僧綱之員數



雖為宿老有智高僧。被越少年無才之

後輩即是旦傾衣鉢之資且乖經教之儀者也

自今以後不蒙免許昇進之輩為寺杜供僧者可被停廢彼職也

雖為御歸依僧同以可被停止之

此外禪侶者偏仰顧眄之人宜有諷諫之誡

一奴婢雑人

之事

右任右大將家御時之例
無其沙汰過
十箇年者。不
論理非不及
改沙汰

次奴婢所生

奴婢とゝ〻しの事

右任右大將家御時之例
無其沙汰過十箇年者不
論理非不及改沙汰

次奴婢所生男女事

之男女事

如法意者雖
有子細任同
御時之例男
者付父。女者
可付母也

如法意者雖有子細任同
御時之例男者付父女者
可付母也

一百姓逃散

一百姓逃散時孫逃散令

時。称逃毀令損亡事

右諸國住民逃脫之時。其須主芋称逃毀。抑留妻子奪取資財所行之企甚背仁政若被召決之処有年貢所當未濟者可致其償。不悉者早可被糺返損物。但於去留者宜任民意也

一称當知行

掠給他人所領。貪取所出物事

右搆無實掠領事式目所推難脫罪科。仍於押領物者早可令糺返。至所領者可被没收也。

無所領者可被處遠流

次以當知行所領。無指次申給安堵御下文事。若以其次始致私曲歟。自今以後可被停止

他人の所領と私知行と云掠め無實とうの人押領する輩武用の法と推しのがれ糺返さしめ。至人の所領と没收でらるべし。知行するものは遠流に處すべし

次以當知行所領無指次申給安堵御下文事若以其次始致私曲歟自今以後可被停止

知行するものは今知行する所領無指の御下文を申給ひて私をいたすこともあるべきなり

一傍輩罪科未断以前競望彼所帯支

右積勞効之輩企所望者常習也而有所犯之由令風聞之時罪状未定之処為望件之所

一傍輩罪科未断以前競望彼所帯支

右積勞効之輩企所望者常習也而有所犯之由令風聞之時罪状未定之処為望件之所

領欲申沈其人之条所為之旨敢非正義

就彼申状有其沙汰者虎口之讒言蜂起不可絶欲假使雖為理運訴訟不被叙用盡日之

義

勞効のさうりの輩。和功と所すんうくて所望と企ろい武士のあらそひ料と犯すん人ことゆのて罪も定定でざろふ。をん人のあ代と疑ひ定むんすり。ふ料よ洗ゆんとろふ傍支の輩もちろぶ。此義の所為あんて人傍の所ろき家と失人族ちより

就彼申状有其沙汰者虎口之讒言蜂起不可絶欲假使雖為理運訴訟不被叙用盡日之

人と洗ても彼知りとゆーみうんと張ん人のゆ一家ん。その犯料の旨を奚りとすんとすれべその族の中

競望

一罪過之由披露時不被糺決改替所職事

右無糺決之儀有御成敗者不論犯否定貽鬱憤歟

者早究淵底可被禁斷

一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者可為新司之成敗至

一罪過之由披露時不被糺決改替所職事

右無糺決之儀有御成敗者不論犯否定貽鬱憤歟

者早究淵底可被禁斷

一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者可為新司之成敗至

とゝ〻てゆたでゝ虎のたのごとき怖しき徒を除の
釋り起るごゝ〻んまの毒とるゝもこと絶べからず。たゞ〻い科と
犯せるたいきのことをして猶もいまも犯罪の輕重なりとも。
ゆゑ〻ゝ死刑を免れ叙用いられまゝ〻さるなり

一罪過之由披露時不被糺決改替所職事

右無糺決之儀有御成敗者不論犯否定貽鬱憤歟

者早究淵底可被禁斷

糺し決の儀なくして罪過と犯や否やの論なく。
査明もなくして禁獄と定まべし。さらば早く
淵底まゝ〻も糺し究めて禁斷せらるべし

一所領得替時前司新司沙汰

得替のうゝ〻めゝ〻ものゝ所領と年貢を渡すべ〻ものなり。
づゝ〻前司新司の沙汰に今のつゝさん

右於所當年貢者可為新司之成敗至

私物雑具并所従馬牛ヲ者。新司不及抑留況今與恥辱於前司者。可被處別過怠也

但依重科被没收者非沙汰限

一以不知行所領文書寄附他人事

付名主職不觸本所寄進權門事

右自今以後

於寄附之輩者可被追却其身也至請取之人者可被付寺社修理

次以名主職不令知本所寄附権門事自然在之如

然之族者名名主職可被付地頭無地頭之所者可被付本所

一 賣買所領事

右以相傳之私領要用之時令沽却者

付地以名主職不令知本所寄附権門事自然在之如

一賣買所領事

右以相傳私領要用之時令沽却也

定法也。而或
募勲功。或依
勤身預別御
恩之輩。怒令
賣買之条。所
行之旨。非無
其科。自今以
後。慥可被停
止也

募勲功或依勤身預別御恩之輩怒令賣買之条所行之旨非無其科自今以後慥可被停止也

若又背制符
令沽却者。云
賣人云買人。
共以可被處
罪科

若又背制符令沽却者云賣人云買人共以可被處罪科

一兩方證文
理非顕然時。
擬遂對決事

一兩方證文理非顕然時擬遂對決事

右彼此證文理非懸隔之時雖不遂對決直可有成敗欵

一狼藉時不知子細出向其庭輩事

右彼此證文理非懸隔之時雖不遂對決直可有成敗欵

一狼藉時不知子細出向其庭輩事

右如同意與力之科者不及子細至其輕重者無難定式條尤可依時宜欵

為聞實否不知子細出向其庭者不及

右如同意與力之科者不及子細至其輕重者無難定式條尤可依時宜欵

為聞實否不知子細出向其庭者不及罪科

罪科

一帯問状御教書。致狼藉事

右就訴状被下問状者定例也。而以問状致狼藉事。

一帯問状御教書致狼藉事

右就訴状被下問状者定例也。而以問状致狼藉事。

所詮盥之企難遁罪科。所申為顕悪之僻支者。給問状事。一切可被停止

起請 御評定間理非決断事

所詮盥之企難遁罪科所申為顕悪之僻支者給問状事一切可被停止

起請 御評定間理非決断事

右愚暗之身。依了見之不及若旨趣相違事。更非心之所曲。其外或為人之方人。乍知道理之由。又為非據事。号有證跡。為不顕人之恒例。乍令

右愚暗之身依了見之不及若旨趣相違事更非心之所曲其外或為人之方人乍知道理之由又為非據事号有證跡為不顕人之恒例乍令

知子細付善悪不申之者。意与事相違。後日之訛謬出来欤。凡評定之間於理非者。不可有親疎。只可有好悪。只道理所推。心中之存知。不憚傍輩。不恐權門

知子細付善悪不申之者意与事相違後日之訛謬出来欤凡評定之間於理非者不可有親疎只可有好悪只道理所推心中之存知不憚傍輩不恐權門

同じ憲法也。仮理と雖

同じ憲法也仮理と雖

擬一同之越度也。同じ

可出詞也御成敗之事切之條ヒ。緞雖不違道理。一同之憲法也。誤雖被行非據一同之越度也自今以後相向訴人并其縁者。自身者雖存道理傍輩之中

後相向訴人宣之庭ニ弁置其縁者元同之輩越訴之中ニ書ニ行ニ元同條ニ

以其人說致違乱之由有其聞者。己非一味之義殆貽諸人之朝者歟兼又依無道理評定之庭被弃置之輩越訴之時評定衆之中被書与一行者。自餘之

討清盛ニ也。獨仏ニ奉ル

ニ預ル仏法ニ。而如ク来

踐為一事。有曲折。今遠犯

ル。

梵天帝釋四大天王擁日

本國中六十餘州大小神

祇殊霊神。西別權現

三島大明神。八幡大菩薩

計皆無道之
由獨似被存
之欤者條ヒ
子細如此若
雖為一事存
曲折令違犯
者
梵天帝釋四
大天王摠日
本國中六十
餘州大小神
祇殊伊豆箱

天満大自在天神社天神社類者
屬神罰冥罰者可罷蒙者
也仍起請如件
貞永元年七月十日

根両所権現
三島大明神
八幡大菩薩
天満大自在
天神部類者
屬神罰冥罰
各可罷蒙者
也仍起請如
件
貞永元年七
月十日

二階堂民部丞 沙弥 行西
奉行外記大夫 散位三善朝臣倫重
加賀守三善朝臣康長
二階堂陸奥介 沙弥 行西
中條 前出羽守藤原朝長家長
三浦 前駿河守藤原義村
北條 摂津守中原朝臣師員
武蔵守平朝臣泰時

齋藤兵衛入道　沙彌淨圓
佐藤　相摸
大條藤原業時
太田　女番
允三善康連
後藤　左衛門少尉藤原朝臣基綱
二階堂民部太夫　沙彌行忠
矢野外記太夫　散位三善朝臣倫重
加賀守三善朝臣康長
二階堂隱岐

御條

○起請の起て法神と信じ除災起福の誓願を敬ふ○武
家大良御定の所と云て代々の御御定の
間厚く理世と安堵して成敗を專らるるの○專る和い起請
文の所出ところの人愚の時さ為に理世の準ひて是の及
ばざるの所出ところ遠の事もあらんむすんとおもひ
ぬ人の為人にして我景頃ところ人の向い
和の為理を知るべきの事。又據世ぐらこもいさ
もうんのことして。況於の理ありしや。又人の類とあらざ
あらんと知るべき者とも無くやんぐるべいむと事とい
しに御定の旨に叶ず怪自の紙懇ぢ事らん況ば御定の間
理世に於ていたらしめ
ぬるんもへんそうく乃理に任せんよりも倭寇の
も捨への威勢も恨らず。剛と為すべし。但威敬のことて事の
なること切れ治定しそ乃理に任せざるも御定の憲十三人の憲

法に世に為るる設乃あり。もるべしく一別の類及べ。されば貞今
後弥人義を獨の為に知りて。遠孔と段もまもくやさることあるべ
倭寇申に乃知りて。自らん乃理と世に為られど法の
ず。の一方の御の人あらば一味に決定に及ぶいもるべく弥
法人の朝と為さんの御のべ。て又御人の中和理るべ忠弁勅
寄十三人とさべ。一人は。人人の御のの一所と書て
後されば。の所中の年に世を乃ると。代々千一箭寄と定るべ一年の
しと独べ。と定る。

○梵天帝釈と云ふ
後の帝釈と云ふ仏説に切利天喜見城のことして天帝のことなり。
法華天の主と云と梵天帝釈と云ふ須弥の頂天として
仏説に東に指四天南に指長天西に廣目天北に多聞天擁て日本六
十余国大小の神祇冥加あらんも疑とこめて云弥とは
して。伊豆箱根三島穂耳尊と犯て吉湯社と称す医明賀

入道沙彌行西

中條前出羽守藤原朝臣家長

三浦前駿河守平朝臣義村

攝津守中原朝臣師員

北條武藏守平朝臣泰時

北條相摸守平朝臣時房

茂郡。松葉仙人の錬行仙氏ハ本地千手観音なり。○箱根権現ハ走出也出現せると祀相州足柄下郡函嶺の麓ニ聖占仙人の錬行仙氏ハ本地文殊菩薩なり。○三嶋大明神ハ大山祇神と祀伊豆の加茂郡なり。右副誓言の起請日本の例にて此三社とかくり捷世所なりても此誓文を捧もちて神ぶへ伊豆箱根と出へハ弾正と云らん。八幡ハ應神天皇を祀本朝の宗廟といひ諸社の本なり。神なれバ八幡大神と出べきなり。天満宮ハ菅原道真公の霊にて所祀。報とハ我所作の不正を云。眷屬ハしたがふものゝ親子兄弟妻妾を云。冥罰ハそれと知らずに罰せらるゝ罰を云。向く出来れども罷と退る又武門の内にも家の字あれども皆義にあらず。件のごとしと云。右衛への如くのごとさと云ん。牛ハ大ずして見らねど、○貞永年号のこと始まる。○連名十三人の御家不審先これと位署出と云起請文に宛名ハなくずして御名…のこと。泰時ハ義時に續て執権之時房ハ義時の弟なりて泰時ハ叔父なれども庶流之故執権の續きなれバ泰時のさてるなり。

べきや。○三浦義村と始め平朝臣義村とあり位署書の式と知ずと云べし。義村朝臣とハ書べし。是と名朝臣と云中原朝臣師員などと書ハ氏朝臣と云て三位以上までの事。○沙弥と云ハ仏門に入し人。多田満仲剃髪して入道と云を除て新発意と云わすて知べし。何も知らぬ族ハ髪さへ落せバ入道と云ふ。官爵に関係なるにあらず。○此連名の内後鳥羽院の御謀叛基綱浄定院まで別れり又ハ隠岐遷幸。仍告の御謀叛基清之武門本文にある義久の乱に院の御使方となりしる尤此子息基綱某。継世。○散位とあるハ位階のみにて官なきを云。泉本文ハ泰時の其の文辞とも云べきに連名ありとハ何の分別まて此武門ハ泰時ぶるす。るき後人の書添ふるも知らずし。○此時の武将ハ表向の父なれども。るひ恩ら思えあらそれい。義時續で御威の盛に募り。実朝公まで曉の衰を醸し

成て古今の異同を考へ孫子呉起の兵法を論ずる事恭時文祖父
父子の君臣の道を説く中に条々を設て第一に変化人の力と云
相付武用を定て付法天下より万国に及ぶの
る養平るより四海世を治て児童まで後の教
もなることとなりて於鄙より行くまでの詳解と書
して出雲の雲よ為ずと云

文政十年丁亥二月下旬　高井蘭山識

玉巖堂藏版目録

東都両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門

梧窓漫筆　錦城太田先生著　全二冊

先生平日随筆劄記ノ書也古今治乱ノ本原ヲ推シ風俗盛隆ノ係ル所ヲ論ジ博ク経傳子史ヲ引テコレヲ証シ又學術ノ邪正ヲ辨ジ天人ノ秘蘊ヲ漏ス實ニ天下有用ノ珍編ト云ヘシ

同後編　同上　全二冊

前編ニ漏レタル妙論ヲ載セ又経學詩文ノ流派ヲ辨別シテ其精確ヲ極ム前編ト同ク双璧ノ書ナリ

同三編　同上　全二冊

向者刊行スル此書前後編四冊盛ニ世ニ行ハレ戸ヘコトニ購ヒ人毎ニ繙テ古今ノ事理ヲ通暁ス今此篇ハ彼四冊ニ漏レタル奇事異説ヲ湊合シ全函ノ鴻寶トス

農家調寶記　高井蘭山先生著　全三冊

農ハ天地間ノ耕作せる由来より百姓家ハ
ふるゆゑ四時の動方作物の植方検地
の年貢収納の法用水の堀方諸類の肥方
男女嫁娶の式木の植方蚕種の飼方
方とかせしも石に成る人き第代お續不易の
農業まなびき宝書なり

農家用文章大全　同上　一冊

用文章の書数多とはいへども書札並出帳書
出の要領詩文の類或は華やかなる文辞又は流の
雅をつゞりたまふ文章を学ぶ今日の急務
耕作農具村法の耕作の家に要用の文字
撰び年中定式諸届諸用の文章つゞり
辺土遠国の作法くし農家の子弟
の閲覧せんとせ　幼童教育便利の書
なり

梧坡教諭 錦城先生附言 堯民先生著 全二冊

世教輩成ノ意ヲ主トシテ旁ラ故事古書ヲ引テ証明シタレバ梧窓漫筆ニ類シテ又別ニ楗経ヲ開キタル珍書ナリ

朱子家訓經典餘師 齊田先生述 全一冊

此書ハ南宋の名儒朱熹先生平生子弟ニ導ケシ人倫乃道ヲ明ラカニシテ人常の理ヲ述ベシ家訓ニ倣ヒ家ヲ以テ書ト齊ムる最一の書ニ今ハ家ヲ以テ書ト和解シ士農工商ノ解ラ先ヲ優ニ理ヲ會得シテ一家ヲ等ヒクヒ子孫ニ久敷伝ヘさ基ナリ

笑戲自知録 伴田陳人著 全二冊

此書ハ儒学ふりとづくひ半ヲ以テ呑の秘術又ハ秘訣と車のごとく四ツの戯術幾般と称ふて天下一の宝とする採乃又ハ秘一ふて天下一の宝とする採乃戯術幾般と記して一時の解睡ふ俗ふる西白記書ナリ

除蝗錄 大蔵永常著 全一冊

此書ハ稲ふ虫の害を除く法を記めして田畑のよく実をべ収穫と毒く記しなるバ農家ハ一ふ一ふとたくさんへ宝ヒもべき書ナリ

野総茗話 常盤潭北著 全五冊

此書ハ世ら老ふ父子夫婦の礼法より実又数別ニ有ふて随筆記録ふのるもの多ふ儒者の心法ヲ乃みて知る必書ト云ベシ

秘傳産寶記 両面板 折本

此書ハ病犬毒虫外平生ふ産ベき産ヒさ妙薬と記ヒ又ハ長崎の志ふりの油ふ産の法或ハ途中毒蛇の急難と救ふ方ふ乃ふ記せり古板麈滅せ一ふ補再梓ふて世ふらせる人ふ寄ふ士農工商ふ懐中ふて日用宝寶有益乃珍書ナリ

實語教童子教 頭書無點 全一冊

古狀揃萬寶藏 無點頭書 全一冊

實語教證註 全一冊

古狀揃講釋 全一冊

御成敗式目 無點大字平仮名付繪抄 各一冊

古狀揃證註 全一冊

御成敗式目證註 全一冊

今川童蒙解 全一冊

天保十年己亥仲冬

東都書林

淺草茅町二丁目 須原屋伊八
両國吉川町 山田佐助
神田鍛冶町 北島順四郎
通二丁目 小林新兵衛
麹町四丁目 角丸屋甚助
江戸橋四日市 上総屋惣兵衛
横山町三丁目 和泉屋金右衛門藏板